

○アキハギク (キヨシミギク) を三浦に採る (靱山 泰一) Yasuichi MOMIYAMA: *Aster Sugimotoi* Kitamura found in the Miura Peninsula.

一昨年の秋 (Oct. 23, 1955), わたくしは田浦の山でアキハギク (キヨシミギク) *Aster Sugimotoi* Kitamura (*A. ageratoides* subsp. *Sugimotoi* Kitamura) らしいものを採った。それは、シロヨメナとひと目で区別のつくもので、シロヨメナが隣りに立っていると、よくそのちがいがわかるのであつた。そのアキハギク、わたくしの見た三浦のアキハギクの形をいって見れば、次のようなものである。まず、茎は1尺前後、紫彩を帯び、シロヨメナよりは丈が低い。葉は、卵形乃至楕円状卵形でひろく、粗い鋸歯があり、末は鋭尖し、もとは截断したような形か、或は、やや心形で、急に狭窄して柄のようになる。葉のおもては、黄緑を帯びて、つやがなく、全面に、前方へ曲つた短い尖つた毛を生じ、それが、ざらざらした、しかも、毛らしい手ざわりを感じさせる。葉裏には、やや長めの毛があるが、それは、とりわけ、主脈の上や葉の縁に多い。そして、主脈上の毛は、標本のとき見ると、左右の方向へ開く傾をもつ。茎にも前方へ屈曲した毛がある。梢に至ると、茎は分枝し、分枝は相寄つて繖房状の花序を作り、花梗は、ほそくて、彎曲し且つ上向する。かなり下の方の葉腋からも分枝するため、草の上半部が大きな花序になることがある。花序に入ると、葉は、まるく小さくなるが、大きな花序には、そのまゝの葉が多く著いて目立つ。そして、茎のもとの方の葉は、花の時季に、枯れあがるので、茎の中程にだけ、葉のあつまっているものがある。総苞は鐘形で、時に、まるみをもつ。花瓣は白、短くてひろかつた。まあ、こんな形のものであるけれども、それは、シロヨメナというよりは、アキハギクの特徴をもっているといつてよいと思う。ところで、シロヨメナ *Aster leiophyllus* Fr. et Sav. (*A. ageratoides* subsp. *leiophyllus* Kitamura) の方は、アキハギクよりは丈が高く、葉も細長い。その葉形は、狭長楕円形乃至披針状長楕円形で、縁には粗歯があり、末は長く鋭尖し、もとの方は狭窄するが、アキハギクほどの柄は作らない。葉の上面は深緑で光沢があり、ほとんど毛を欠くか、あるいは、微小な尖つた毛を疎生し、あまりざらつかない。葉裏にもほとんど毛がない。茎も梢の方をのぞき、ほとんど毛がなく、あつても少い。花序は横にひろがる。花梗はアキハギクよりは強く、総苞は鐘形乃至筒状鐘形、花は、普通、白い。こんなのが、三浦のシロヨメナそのものである。さて、アキハギクがあるのは、峯どおりの、比較的、乾いた場所である。岩の角や木の蔭に、小さな群れを作つて生えていたが、箇体の数は、至つて、すくなかつた。三浦には、いまのところ、田浦の山の、そのあたりにしか見られないから、採集家は絶やさないようにしていただきたい。対岸の房総半島の山、清澄や富山や鯉山に多い。このアキハギクが、むかし、そこ (房州と) 地続きであつた三浦半島に見出されるのは、分布上、きわめて自然で、田浦のほかにも、三浦には、まだ、どこかに生えているところがありそうに思われる。それには、やはり、同じような環境のところをさがせばいいのであろう。昨年また、同じ時季 (Oct. 22, 1956) に同じ場

所で採集したが、そこには、アキハギクのほかに、シロヨメナもあつたし、また、アキハギクとシロヨメナの間形もあつて、その間形は、さらに、三つほどの形に区別されるように見えた。それらの形は、おのおの小さな群れを作つて、離ればなれの場所に生えていたから、もとは、それぞれひとつ筒体から出たものかも知れない。鳥居喜一氏の近著、東三河植物資料 I (Aug. 1956) によると、東三河にも、アキハギクとシロヨメナの雑種が見出されるということである。田浦のアキハギクは、毛がやや少いが、房州には、もつと毛の多いものや、また、毛の少ないものもあつて、毛の変化が目立ち、葉形その他にも変りがある。また、遠州や東三河の本場のアキハギクは、房州のとは形がちがう。三浦のは、もちろん、房州のに近く、それは、キヨスミギクの方なのである。わたくしは、アキハギクが、三浦にあることを、いままで、知らなかつたが、久内先生はとうの昔にごぞんじで、やはり、田浦で採集されたという。先生の採集地は、わたくしの場所からは、ほんのわずかばかり、隔つたところにあるらしい。先生の採集品は、東大にも博物館にもなかつた。なお、一昨年、アキハギクを採つた日 (Oct. 23, 1955) に、沼間の山で、シロヨメナの花のうす紫のを採つた。昨年また、同じ場所で、浅井康宏氏と一緒に採集した (Oct. 14, 1956)。それは、花色のほか、総苞片の先が濃く紫褐色に染まり、茎も深い紫いろをしていたが、それ以外には、三浦のシロヨメナとちがうところはなかつた。葉も深緑でつやつやしていた。東大の標本によると、武州刈倉のムラサキヤマシロギク *Aster leiophyllus* var. *purpurascens* Honda が同じ形のものであつた。しかし、サガミギク *Aster leiophyllus* var. *Harai* (Makino) Hara は、また別の形のように見えた。浅井氏は丹沢のサガミギクはちがうといわれた。沼間のは、シロヨメナの紫花品、シロヨメナといつても、とりわけ、三浦のシロヨメナのそれなのであつた。

□佐藤正巳：有用植物分類学 pp. 530, ¥650, 養賢堂発行。

著者はボゴル植物園での一ヶ年の経験から、植物分類学者も大いに産業開発に協力すべきことを痛感し、それ以来、山形大学農学部で有用植物学を講じた傍この書を完成した。従つてアカデミックな分類学の本ではなく、各科やその他の分類群の特長などは殆ど省略し、分布域や主な属名などを挙げるに止め、専らその科、属に含まれる有用植物について形態、利用を述べている。方々にエピソード的な話があり、挿図も面白く、栽培法、天然記念物などに関する文献引用もあつて、肩がこらずに勉強できるようになっている。陰花植物は僅かに 50 p. 分で、他は顕花植物である。(津 山)